

# 文芸サロン作品集

2024年1月

シニアネット福岡

(SNF)

文芸愛好会



短歌

宮 由枝

寒風に赤き燠おき散る校庭に米蒸す香り広ごりにけり

交替に杵持つ子らに女子まじり掛け声高く校庭華やぐ

餅千切る姫生き生き若きらに手つきたしかに手本見せつつ

仄暗き庭に水仙ふたもとの白際立ちて雨降り初めぬ

積雪は稀に静まる町なかの雪屋根の上鳥低く飛ぶ

庭隅に残るうすらひ小枝にてつつくに痛き音に崩れたり

新年の神楽囃子もたけなはに面の下に汗光りつつ

高畝に大根白く太りつつ冬の用水豊かに光る

平安を祈る

新川 正恵

八十路生く振りえみると長き道喜怒哀楽の吾が史の在り

コロナ禍が少し鎮静した令和五年やり掛けていることを成し遂げたいと考えた。それは弘法大使の足跡を辿る四国八十八のお寺を遍路することです。

阿波の国 土佐 伊予 讃岐の国を一国参りで四回で結願というコースを選んだ。発心の一番霊山寺から始めさせていただいた。

香を焚き燈明をあげ先達に合わせて経を唱えて祈る

本堂に太子堂にお参りし次のお寺に歩を進めたり

目覚めたる波の碎ける音のするここは徳島阿波の国なり

御仏の手に結ばれしお手綱を両手に頂き感謝の告げる

善通寺朝のお勤め肅々と声明響き至福の時を

万灯に香を焚きこめし朝のお勤め丹田に聞く

ほつほつと冬桜咲く三角寺真つ青な空に太師導く

高野山金剛峰寺へ御廟橋御大使様のお迎えのあり

清々しい気持ちでお遍路を終えることができた。

WBC サッカー バスケットボールなど肩に力の入る記憶に残ることがさ  
んせきした。

元日に娘の家から帰りテレビを見て驚いた。

「逃げてください。近寄らないでください」切羽詰まったアナウンサーの声に何  
事かと釘付けになった。

元日の祝膳囲む喜びを震度七越す地震が砕く

今日も又余震に脅える北陸に無常なるかな雪の降るとう

福岡に暮らしていても寒さに襟を立てるこの季に電気水道がなく心休めるこ  
とも難しい被災地の方に何ができるのだろう。一日も早い安穩を祈る。

幼稚園に行った。部屋に大小さまざまなテーブルや本棚類、収納箱がある。いずれも木製。木製であるが上部にいくつものカドがある。カドは危険ということでカド全部にゴムのカバーのようなものを張り付けてある。百円ショップでコーナークッションという名称で売られている。見た目は不格好であるがこれで安全、角がなくなった。安心安全の遊戯室になった。園児がぶつかってもケガをしない。

こどもは危険と隣なり合わせのところで遊びながら危険を避ける方法を学ぶということがあると思う。大人からこの角ばったところにぶつかったらけがをするから気をつけましょうと教えてもらうこともある。上から下まで隅々すべて安心安全保証つきの環境では動物的な反射神経は育たないかもしれない、と余計な心配をする。

新幹線や航空機、運転とか操縦という仕事は危険に立ち向かう仕事である。超スピードとか、地に足がついていないとか。これは怖い。

と思っていたら昨年、新幹線運転中にスマホで競馬情報を見ていた剛の運転士がいたと年末の新聞が伝えている。ところが新幹線には自動列車制御装置（ATC）がついているからこういう運転士の行為も安全性には直結しないそうだ。ベテラン運転士はその安全性にすっかり慣れ親しんで運転しながらちよつと一服、スマホで競馬でも見るか・・・

パイロットも気象が安定していると操縦桿から手を放してトランプで遊ぶという話を聞いたことがある。

運転中、スマホでの競馬情報、この「勇氣ある」行為は業務用スマホの使用履歴検査で発覚したものだが会社側も腰を抜かすほど驚いてはいない。こちらはビックリ。安全になれる、安全装置を信じる、こういう精神状態は文明人の常としてさしてとやかく言うのは野蛮人なのか。

身を危険にさらす仕事は多い。バスやタクシーの運転手などは毎日交通事故という危険との戦いである。プロパンガスのボンベを車で運んでいる光景を見た。高さが一メートルを超えるボンベを車から降ろして注文先に届ける。ボンベを車から降ろすのに手押し車を使う。積み替える。この作業はボンベをだき抱えながら行う。一歩まちがえるとボンベが倒れて足を直撃する。抱きかかえてい

るときに何かの拍子にふらついたりするとボンベと一緒にそれこそ共倒れ。

多くのボンベ運送はトラックの荷台が自動化されていて積み下ろしが安全に出来るようになってきているだろうが小さな運送屋さんではまだまだ手動式体力勝負式のようなのである。やはり危険な仕事である。

最近よく転ぶ。家でズボンを履き替えるとき一瞬片足立ちになる。このとき、ふらついて尻もちをついたり横に倒れたりして壁に頭をぶっつけることがある。道路を歩いていてつまづいた。前のめりで道路に転びけがをした。

なぜ転んだのか考えた。当時、小雪が降り出してついつい急ぎ足になった。バス停まであと100メートル、夕方6時過ぎ、あたりは暗い。足元も暗い。わずかなくぼみがあったようで、それに足が追いつかず体が前に倒れたらしい。この急ぎ足がいけない。焦りがいけない。気持ちに余裕がなくなっている。小雪がどうした、小雨より濡れなくてすむではないか。・・・そんなゆったりとした気分を失っている。この焦りが原因の事故だと断定。

かてて加えて・・・根拠なき自信と生来の横着人間。幼少のころから身のこなしがうまい、軽い、ちびのくせに筋がいい、機敏などと囃され、ほめられて、すっかりその気になり、高校では器械体操部で活躍、じゃなくて活動。この原体験がどこかに染みついていて。考えてみればすぐにわかることだが半世紀以上もたつてそんなことが肉体的に続くわけもないのに水たまりをちよこつと飛び越えたり片足立ちをしたりしている。根拠なき自信と不相応なうぬぼれ、老いぼれ老衰の自覚無し、プラス元来の横着者、体中に危険分子が住みついていて。根拠なき自信、絶滅危惧の身の上。その自覚が足りない。ヨロヨロしながらもウロウロしている老い老いさらばえた肉体。自戒と反省を本気でやらねば・・・

道路はどこも舗装され、でこぼこや段差はほとんどないことにすっかり慣れている。これがいけない。

あの道路での転倒事故も歩道は安全という「神話」に慣れ親しんだ己に油断があったと反省しきりである。

運転手には交通事故。ボンベ屋さんにはボンベの転倒。みんな危険と闘いながら安全策を考えながら仕事をしている。危険があることが安全につながる。まったくカドのない遊戯室、ここで身のこなしに慣れ親しんだ子供は一步外に出てカドだらけの外界でどう身を処すのか。

## 初体験

山本 為三

子供から大人へ成長するとき、ひとはいくつもの体験を重ねる。初体験の連続である。大人になっても心身両面で初めて知った、聞いた、見た、食べた、経験した、会った、感じた……

こういう初体験には驚きがあるが、この驚きにはあらかじめ想像できる驚きと、全く想像できなかった驚き、つまりビックリもの、この二種類があるように思う。

想像できる驚きは、まあこんなものだろうなという程度、つまり想定内の驚きである。一方、想定外の驚きというのはビックリというやつ。へえ、そういうわけかと目をパチクリしてしまう。目だけですまず足腰が立たなくなるような、腰が抜ける驚きである。想定外の方はビックリ度に幅がある。ビックリしたなあで済むのもあれば気絶寸前というのものもある。

東日本大地震の時の津波、これをテレビで見たとき、びっくりした。腰が抜けるほどびっくりした。想像を絶するという驚き。津波という言葉や理屈は知っていた。テレビで見たこともある。その怖さも歴史とか災害や地震防災の本で知っている。地震のあとこれが津波です、川が上流に逆流していますとテレビが伝え、映像はひざぐらいの高さの波が河川を逆流する様子を映している。この程度の津波の映像は何度か見た。

しかし東日本の津波はけたはずれの大津波。想定外、想像を絶する津波にただただ啞然とする始末。怖かった。「津波を知った」の初体験。知ったかぶり、一知半解、不勉強に恥じ入る。

高校時代、琵琶湖を見た。友達と湖畔でのキャンプに行った。琵琶湖はでかい。日本で一番大きな湖だと知っていたかどうかは不明。その大きさは岸边にいてはわからない。教科書や地図帳でも事前に勉強しておれば、知っているというレベルで知識はあるが琵琶湖を見たのは初めて。そして驚いたことに琵琶湖に波があること、岸边には波が打ち寄せているではないか。しかも向こう岸が見えない。友達はどんな反応を見せたかは記憶にないがなにしろこちらは大阪の田舎育ち、水遊びといえ半半径五十から百メートルレベルの溜池ぐらい。底が泥だから危険、泳ぎ不得意の少年はこわごわ池に足を浸していた程度。琵琶湖の、さざ波×5の波を見て一瞬驚いた記憶がある。つまりビックリしたのである。自我の芽生えるころ。プライドがある。波にビックリして大いに驚いている自分を見せるわけにいかない。口に出さない抑圧型ビックリ体験だった。

学生のころ、初めてすし屋に行った。小学低学年の兄弟二人の勉強の面倒を見

ていた。その母親に連れて行かれた。連れて行ってもらったが正しい。店に入った。ガラスケース、生魚が入っている。その前に座った。ケースと板の間の十センチのすき間に盆栽のようなごく小さな木が植わっている。木の根っこには緑の苔と白い小石が敷き詰めてあって水が流れている。ごく小さな水道の蛇口がある。丁度せせらぎを前にしながら寿司をいただくしつらえになっている。寿司屋さんの初体験。さん付けに変更。それもいきなり高級寿司屋さん。何をいただいたか全く覚えていない。奥さんの行きつけの店らしいと感じたことはうっすらと記憶している。当時、すし店は大衆化していない。まして学生の分際で寿司など食べない。大衆食堂でお好み焼きかタコ焼きでワイワイがせいぜい。高級寿司屋さん初体験。その高級さにドギマギ、上がりっぱなし、緊張しっぱなし、代金はいくら？そんなことに気が回るわけがない。そもそも寿司の味が分っていないかった筈だ。こんな奴をこんな店に連れて行った奥さんの善意、もちろんご馳走さまぐらいのお礼のあいさつはしたと思うがどこがどううまかったのかそんなやり取りもなかった。恥ずかしさと緊張とビックリの物語。

高校時代、東京の言葉を話す体育の先生がいた。つまり標準語をしゃべる先生。ラジオ体操まがいの授業中にバレーボールで遊んでいた生徒たちのボールがころがってきた。すると体育の先生はちよつと怒りながら「ダメダメ」と大声を出した。こちらは授業中だ、邪魔するなという注意である。歯切れのよいよく通る声の持ち主。それが「ダメダメ」と叫んでいる。

びっくりした。このダメという言葉が初耳だった。大阪にはその当時ダメという言葉はなかったように思う。少なくともわが生活圏ではダメは聞いたことがない。ダメのときはアカンとかチャウとかエエカゲンニセエとかで始末をつける。拒否、反対、注意警告などの意思表示の方言である。

通りの良い声で怒られた生徒はダメの意味は分かっただけで謝りながらボールを拾い上げて立ち去った。ダメの意味は知っていたらしい。



▽店選び

食事ができる小店、居酒屋、コーヒー店・・・レストランとか喫茶店と呼びにくい小さな安い店にはいるとき、入るか入らないかの判断はイスで決める。いかにも粗末な安手のイスの店には入らない。小汚いイスが並んでいる店にも入らない。固定式で一本足のイス、これもごめん。

ゆったり座れそうなイス、こぎれいに見えるイスを求めてウロウロ、気に入ったイスは案外見つからない。

店の明るさ、照明も考える。うす暗い店はお断り。夜のバーじゃあるまいし照明を落として雰囲気を出しているというレストランがある。メニューや伝票の字が読みにくい。この暗さがわが店のポリシーですと店主が威張っている。うす暗さ嫌悪症、暗い店は嫌い。自分のいく店は明るくあるべし。これが私のポリシー。

芸能人、有名人の色紙がいっぱいのお店。これも遠慮する。まあ、こういう人が来ている店ですよ・・・色紙を掲げる気持ちはわかるがどうもいただけない。

中には昭和のスターのサイン入りを大事に張り付けている店もある。油ぎって汚れている。

▽即答

歯医者に行った。女性のスタッフに尋ねた。歯を診てもらっているとき、口を大きく開ける度に私の顔はものすごい形相になっていると思う。これは女性の場合もおなじですか、どんな美人でもこんな顔をしますかともものすごい形相を見せて見せた。

そうですね、すごい顔になりますねと答えてくれると期待しての質問である。ところが違った。歯を治療している時には歯そのものに集中していますのでお顔は見えていません。味もそっけもない言葉が返ってきた。にべもない冷静な答弁。

もうちよつとユーモアのあるその場を和ませるようなお言葉が無いものかなあ。質問をした方が悪かったみたいなやり取りになってしまった。

しかしすぐに思った。この女性スタッフはプロだ。立派だ。形相がどうであれ

患者の容態に関することを軽々しく口にすべきでない。これは歯科関連の学校で最初に教わる心構えだ。軽口をたたく患者もいる。それにうかうか乗ってはいけない。

患者もお客さんとすれば、歯科医も客商売。リップサービスも時には必要であるが湯加減がむつかしい。

#### ▽美学

デパート、デパートの食品売り場。時に新商品かなにか、試食の女性にいかがですかと勧められる。女性のそばにはその新商品が山積みになっている。試食してもらってうんこれはうまい、一つ買いましたようとなればこの企画は成功。

でもね、見てみると、すゝめられて試食した人の多くは試食しただけでその場を通過。新商品を買う人はあまり見ない。

ときどき上下スーツを身につけた男性が堂々と試食しているのを見かける。係の女性とおしゃべりしている。ヒマなのかしゃべりながら2〜3分口を動かしている。スーツ姿に試食は似合わない。

男性の生きざまには美学が大事。美学とはプライドや名誉、面目とちよつとちがう響きを持っている。要するにかっこよく生きるべしということかな。

#### ▽ことば

清く正しく美しく。華やかでみんなが夢見る存在がドタツとくずれた。宝塚は崩れた落差が大きかった。ファンは大いに戸惑ったことと思う。そのいじめたるや相当激烈。会社はいじめを否定している。被害者側は結構具体的に主張している。

いじめの時の言葉がすごい。ウソつき野郎：女性が発することばとは思えない。ましてあの美しい華麗な女性がこんなことばをやすやすと口から出すとは思えない。野郎はこの野郎とかバカ野郎とか怒りや怒鳴り散らかす時にしか使わない。品のないことばである。まあ男性でも使うのは限られた男たちだろう。

宝塚にこんな言葉を口にする女性がいらつしやるとは：そんな女性が紛れ込んでいたのかな。品格の無さ、極まれり・・・いじめについての会社側の否定は最後まで死守してほしい。

## 『年賀状』再考

手柴 正義

今年も以下のメッセージを付して輪ゴムで纏めた年賀ハガキがポストに届きました・・・

『あけましておめでとございます』

本年も皆さまの大切な年賀状をお届けします

私たち郵便局にはこの国のすみずみまで広がるネットワークがあります

この広がりとながりを活かすことで地域や社会に貢献していくこと

それが郵便局の目指すこれからの姿です

進化を続ける日本郵政グループにご期待ください』

令和六年 元旦 日本郵政株式会社 社長 増田 寛也

参考 『二〇二二年の同メッセージ』

『二〇二二年のあなたに 最初に届く手紙 想いのこもった年賀状を大切に  
お届けします』

年賀状は新年を迎えた喜びとともに幸せを祈るきもちまでお届けします

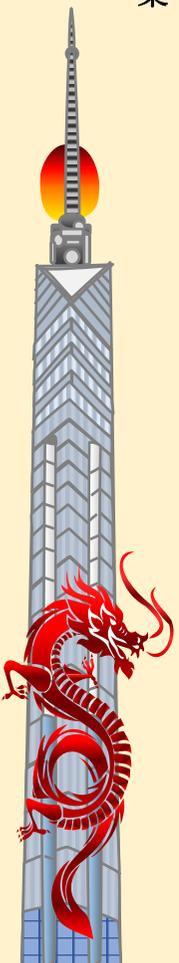
日本郵政グループはこれからもこのよき日本の文化を大切にして

まいります』

日本郵政（株）取締役兼代表執行役社長

今年の私の年賀ハガキをお披露目しますと…

## 一案



明けましておめでとございます

健やかに新春をお迎えのことと思います

昨年末には新型コロナウイルスの六回目やインフルエンザの

予防接種もすませ ラジオ体操を日課に 健康・体調管理に

気をつけて元気に過ごしております

本年も創設二四年目を迎えます『新しい時代のシニアライフ

を応援します』をモットーのNPO法人シニアナット福岡

(会員二五五名平均年齢七五歳)の仲間と一緒に 福岡市後援

高齢者対象の『いきいきパソコン教室(生涯学習)』の運営や

会員交流行事に参加し シニアライフをエンジョイして

行きたいと考えおります

本年もよろしく願いいたします

二〇二四年 元旦

(福岡タワー 二三四m 日本一の海浜タワー 三六〇度パノラマ 福岡市街一望)



令和六年元旦

健やかに新春をお迎えのことと思います

この賀状は私共NPO法人シニアネット福岡のパソコン

教室『ワードでお絵かき講座』で勉強した作品です

本年もよろしく願いいたします

さてさて・・・

年賀ハガキの交換の数、右肩上がりでなくて右肩下がりの状況、今年の六月で八

十八（米寿<sup>べいじゆ</sup>）を迎えるシニアネット福岡に居ながらアナログ人間、活字で読ま

ないと安心できない、メールの後に電話で確かめないと落ち着かない：一周遅

れのマサヨシさん：「元気の証・近況報告便」：今年の九月？ には郵便料金の

大幅値上げの話もある中 いつまで年賀状交換続くことやら??

## 甑島(こしきじま)

三島 武

六月の中旬のことである。ボランティア仕事が一段落したのを機に、十日先までの天気予報を確認して急遽、甑島行きを思い立った。

上甑島と下甑島を一五三メートルの橋で結んだ甑大橋が、二〇二〇年の八月に開通した時から是非一度は行ってみたいと思っていたところだ。

串木野港から乗ったフェリーで、かもめとイルカの歓迎を受けながら上甑島の里港に着いた。予約していたレンタカー屋の夫婦に迎えられて、島内の概略の説明を受けた。北端から南端までの島の東側を走る主要道路の約百キロメートルは整備されているが、山を越えて西側(東シナ海側)に行く道は、細くて未整備な処が多いという。一泊二日の島内ツアーを、軽自動車を借りてゆっくりめの二泊三日のドライブに出発した。

まずは腹ごしらえだ。「島内の食事処は少ないし、平日は休んでいる処も多く、土日は満杯になる怖れがあります。どちらにしても、お昼は予約してたほうが良いですよ」との観光協会のアドバイスで、予約していた地魚を食べさせる食堂へ二日とも出かけた。

福岡で食べる玄界灘の魚と、さほど変わらない品々だったが、ただ一つキビナゴの刺身と揚げ物は本場の味がした。

東シナ海からながれ着いた礫(レキ)が堆積して出来た幅五十メートル、長さ約四キロにわたって続く砂州の「長目の浜」などを中心に、上甑島を見物し、早めに宿に着いた。

初日の宿は、里港のすぐ傍のホテルである。コロナ禍中は、休業していたらしく、至る所の整備が、まだ行き届いていなかった。例年ならば、観光シーズンの七、八月は、盛況になるようで、今年の夏に期待しているそうだ。

二日目の午前中は「観光船かのこ」に乗って、東シナ海の大自然によって造られた奇岩や断崖を巡るクルージングに出かけた。オフシーズンの平日、私達夫婦だけである。舳先に乗って奇岩すれすれのスリルを楽しんだり、飛んでくるかもめに餌を手渡したりして、約二時間観光船を二人占めにした。

昼からは、待望の甑大橋に向かった。片側一車線のゆったりとした車幅の橋が少し左に曲がって一・五キロ続く。車を止めて中央線で前後左右をゆっくり見る。車は七、八分に一台しか通らない。費用対効果は大丈夫だろうか、と心配になった。

この日は下甑島のこしきしま親和館に泊まった。

四十数年ぶりに、たった一人の兄の葬儀のために大阪から帰郷した、と言う同宿の七十歳くらいの男性と食堂で親しくなった。酒をさし合いながら時を過ぎた。

「昔は島の誰もが貧しかったが、村人の纏まりは強かった。みんなが知り合っていた。離島だけに皆んなで助け合っていた」と、懐かしさを噛みしめながら、しみじみ語る故郷を離れた男の言葉が身に沁みだ。久しぶりの実家の人との交わりの希薄さが想像された。

三日目は、映画「Dr. コトー診療所」の原作地、野々瀬浦集落に、ナポレオン岩を観に向かった。

離島に來ると、いつも気になっているものが、その途中にあった。

東シナ海に浮かぶ観光明媚なこの島で、西部航空方面隊で唯一のカメラレコーダーを有する第9警戒隊が、日夜、警戒監視の任に当たっているという。北朝鮮がミサイルを発射した時など、このレーダーが追跡するのだろう。

尖閣諸島に近い空域の防衛のためにも頑張っていて貫きたいと祈りながら傍を通り過ぎた。

甕島には上には里麓武家屋敷群、下には手打麓武家屋敷群がある。源頼朝の御家人であった小川氏が承久の乱で奮戦した恩賞として甕島を与えられ、四百年にわたり島津家の庇護のもとに統治。その後江戸時代になって直接島津家が国境の防衛役を果たしたという。昔も今も国を守る最前線の島である。整然と続く美しい玉石垣の屋敷群を、古の防人達の想いを感じながら散策した。

帰りは同じ上甕島の里港から川内港に向かって高速船に乗った。この船と川内港ターミナルは、あのJR九州の「ななつ星」を監修した水戸岡鋭治氏のデザインである。木をふんだんに使用した落ち着いた雰囲気とオシャレな空間。こんな処にも水戸岡さんは実績を残しているんだ……と感心した。

甕島の観光シーズンは夏の七、八月だという。青い空と海が満喫出来る。同時に七月から島内中で咲き始める鹿の子百合が見られるそうだ。

今回の旅では、この百合の群生と会えなかったのは残念であるが、梅雨時の晴れ間に恵まれたこと、ゆつくりとした日程で多くの土地が回れたこと、日常の島の静かな生活が垣間見えたこと、国を守る意識が感じられたこと、ツアー客では味わえない人との交わりが出来たことなど、多くの実りがあった。

この歳になって、行きたかったところへ行けたことの幸せを感じている。

(2023年六月)

